

発達保障の道

～歴史をつなぐ、社会をつくる

【第7回】

戦争経験と平和・民主主義への問い



金沢大学
河合隆平

かわい りゅうへい
1978年福井県生まれ。金沢大学准教授、全
障研常任全国委員。専門は、障害児教育学。著
書に『発達保障ってなに？』共著（全障研出版
部）など。

今年7月、「ヒバクシャ」の痛苦とねがい未来を刻むように、国連で「核兵器禁止条約」が採択された。戦後社会の「戦争をする国」づくりを許さないといくみは、障害者を生み出す最大の暴力が戦争であるという歴史の反省に根ざすものでした。今回は、アジア・太平洋戦争下の肢体不自由児たちの学童集団疎開の歴史を通して、障害のある人びとの戦争経験から浮かび上がってくる平和と民主主義への問いを考えてみましょう。

最も遅く、最も長い学童集団疎開

1945年5月15日、戦前唯一の公立肢体不自由児学校、東京都光明国民学校（1932年東京市立光明学校として開校、現在の都立光明学園、以下、光明学校）の50数名の子ども、教師、保母、看護師たち合わせて約150名を乗せた列車が、長野県更級郡上山田村上山田温泉上山田ホテル（現在の千曲市）への集団疎開に向けて上野駅を出発しました。東京の国民学校が学童集団疎開を始めた1944年8月から、9ヵ月ほど遅れての実施でした。脳性マヒ、ポリオ、脊椎カリエス、股関節脱臼などがあり移動が困難な光明学校の子どもたちは、政府や都の疎開・輸送計画から除外されていたために疎開先の割り当てもなく、校長が役所に相談しても相手にされませんでした。1944年8月、光明学校はやむをえず世田谷の本校舎に教職員と約半数の子どもが泊まりこみ、残りは通学するという「現地疎開」にふみ切ります。農村地であった世田谷区を疎開先とすることは珍しくありませんでしたが、光明学校の「現地疎開」は政策的な放置を意味していました。

1945年3月10日の東京大空襲では学校の近くまで艦載機が飛来したため、これ以上留まるのは危険と判断した校長は自力で疎開地を探し回り、どうにか上山田ホテルで受け入れてもらえることになりました。光明学校が上山田での疎開生活を始めてから10日後の5月25日、米軍の空襲により世田谷校舎は学習棟だけが焼け残り、麻布分教場は全焼しました。東京の学童疎開は遅くとも1946年3月までに解除されますが、光明学校の場合、新校舎が完成する1949年5月まで、4年間にも及ぶ例外的に長期の疎開生活を強いられました。

3ヵ月で敗戦を迎えますが、焦土と化した東京にただちに帰ることもできず、肢体不自由児が入学できる学校もないため上山田に留まらざるをえなかったのです。1946年4月からは「戦争孤児等学童集団合宿教育所」として、1947年4月からは新学制のもとで都立光明小・中学校として疎開が継続されました。空襲の恐怖から解放されたとはいえ、子どもたちにとって親と離れて暮らす寂しさはもちろん、配給や食糧事情も厳しく、敗戦後も続く疎開生活は苦しかったものの、教職員や保母、看護師たちの懸命な努力、ホテルや地域の人びとによる支援と交流によってどうにか支えられていました。

体の不自由なところは心と頭で切り抜いて下さい

障害のある人びとは「穀つぶし」「非国民」。そうした排除と侮蔑のまなざしをはね返すように、障害のある人びと自身も戦争を担う一員なのだという自発的な意思と姿勢を示そうと努めました。1945年3月24日に行われた光明学校の卒業式における送辞と答辞を紹介しましょう。まずは在校生の送辞から。

皆様は特攻隊ですから勝つ心を知識をしつかり身につけて堂々と嵐の世の中へ乗り出し精一ぱいに働いて下さい。…体の不自由なところは心と頭で切り抜いて下さい。然かし体も大いに強くきたへて下さい。…いつ本土に敵がくるかも知れません。ヤンキー「アメリカ人に対する俗称」河合」がきたら皆様も私達も共にがんばります。三千年の歴史を守りませう。

続けて卒業生の答辞です。

今日私共は、なつかしいまなびの庭をすだつて決戦の眞只中に飛込んで行かふとして居ります。…例へ身体

「戦闘配置」されなかった肢体不自由児

「疎開」とは、もともと突撃前に小隊や分隊の間隔を開くことで敵の火力の効果を弱め、歩兵を前進展開させる戦闘方式を意味しました。本土空襲が始まり防空対策が強化されるなか、政府は1943年以降、空襲被害を避けるための措置に「建物疎開」「都市疎開」「学童疎開」など、一般的に耳なじみのない「疎開」という軍事用語をあてるようになったのです。

東京都は、1944年8月から9月にかけて国民学校3年生以上の子ども約21万人の学童疎開を実施します。このとき、東京都は国民学校の校長に向けて「帝都の学童疎開は、其の防空態勢の強化であり、帝国将来の国防